

## + 6 6 【ぶたたま】

【ねこまた】騒動（そうどう）が終わったばかりなのに、また村びとたちが騒ぎはじめたことがありました。

とにかく村びとたちは、たぶん騒ぐのが好きなんだろう、なんでもかんでも騒ぎすぎる。

こんどは【ぶたたま】がでたというのです。

豚肉と玉子をつかった、新しい食べ物としかおもわれなかったので、「わしにも、その【ぶたたま】くわせろや」

というと、

「頼むで、金ちゃん。【ぶたたま】食ってけろや」

飯場（はんば）の半さんが、よろこんでいました。

半さんには、残飯（ざんぱん）を何度か貰っていたので、恩があります。

【ぶたたま】食って半さんがよろこんでくれるなら、万々歳（ばんばんざい）です。

それにしても、旨そうな名称です。

「どこにあるんじゃ、【ぶたたま】は」

ときくと、

「どこにある、というよりも、どこにいる、だよなあ」

と、半さんは変な返事をする。

これはやばいとおもっていると、

「裏の厨房（ちゅうぼう）さ、顔だしてみろや」

「ちゅうぼうたあ、めしつくとこじゃな」

半さんが案内してくれないので、あとに引けなくなったぼくは、飯場の厨房に行きました。

するとそこに、汚くてでっかい、いっぴきの豚がいて、ひたすら玉子を食っている。

玉子の殻（から）まで食っている。

「おまえが【ぶたたま】かい」

きいても、返事がありません。

ぼくのことにも気にならないふうで、玉子ばかり食いまくっている。

そうして、玉子を食い終わると、ちらかった厨房からおもむろにでていきました。

(なんじゃい、ぶたが、たまご、くつとるから、【ぶたたま】かい。だば、わしが、たまご、くつとったら、【きんたま】かい)

莫迦莫迦（ばかばか）しいとおもいながら、懐爺に事のあらましを告げると、

「【ぶたたま】もおばけなんですよ。そうやって玉子をいっぱい食べると、こどもを玉子で産むようになります。玉子でこどもを産む豚は、やはりおばけでしょう」

「そうかのう。きょうりゅうだって、たまご、うむからのう。ぶただって、おおむかしは、たまごうんだかもしれんからのう」

「なるほど。恐竜も玉子で産みますね。豚も玉子で産んでも不思議はありませんね」

「そうじゃ。よって【ぶたたま】は、おばけではないのじゃ」

「そうですね、そうしましょう」

というわけで【ぶたたま】はおばけではなくなり、【きんたま】もおばけではなくなりました。

けれども残念ながら、貧乏なぼくの家では、玉子など食べたことがなく、ぼくが【きんたま】になったのは、ぼくの金玉が大人になってからでした。